

傾斜地帯に於ける農業経営の一典型

中原 武・小泉 所

Takeshi NAKAHARA and Tokoro KOIZUMI : A Typical Pattern of Farming
in the Area with the Slope of the Land.

(1955年12月10日受理)

1. 緒 言

ここに改めて述べるまでもなく、農業経営をなすに當つて傾斜地はあらゆる面に於て不利である。土壤は浸蝕されるし、總ての作業に労苦を伴う、又多くは灌漑の便にも乏しい。

ここに紹介する一農家はこのような自然環境下にあつて、よく斯る環境に適合する作物を選択すると共に、経営に一貫せる計画性をもたせ、社会環境の変転による計画の翻転に対しては、又適当な作物を選択することによつて空隙を埋め、もつて所期の目的に到達し、経営をば安定に導いた一農家である。近時、傾斜地農業の改善がさげばれている時、(昭和30年11月6日・朝日新聞社説参照)この農家は傾斜地に於ける農業経営の一つの典型を示すものと思われるのでここに紹介する次第である。

尙、この農家が特に力点を置いた作物は所謂質的集約作物と思われるので先ずそれについて簡単に説明し、この農家が採用したこの種の作物経営が、如何に彼が住する自然環境と彼のもつ生産条件に適合したかについて見て行くことにしよう。

2. 質的集約作物の意義

ここに所謂物的集約作物とは技術と共に多量の人的配慮を要求する作物を云う。吾々が種々の作物に対してなされている作業を見ると、其処に於て要求されている作業には細心の配慮と注意、並びに相当の技術を伴うことを要求される作業と、左程の注意と配慮を要しない単純な作業との別があることを見出す。例えば植付、摘果剪定、幼畜の飼育の如きは前者に属し、犁耕、耙耕、播種、刈取の如きは後者に属する作業である。而し農作物の中には前者のような作業を俟つにあらざれば充分の成果を期待出来ない作物部門もあり、後者の如き作業にても相当の成果をあげ得るような部門もある。例えば果樹、花卉、野菜、養蚕、乳牛、家禽の飼育の如きは前者に属する経営部門であり、米麦作、大小豆、馬鈴薯、甘藷の如きは後者に属する部門である。

このように作物別に見た農業の経営部門はその要求される作業の性質からして二つに分つことが出来るが、前者に属する部門に於ては細心の注意と勤勉とが要求される結果、必然的に量的にも多くの労働が要求される。従つて斯る経営部門は必然的に労働容量も大きな部門となる。更に又、このような経営部門は資本の容量も一般に大である。(第1表参照)

第1表 農産物生産費調査抜萃
(昭和20年・全国農業会)

品 目	反 当 生産費	反 当 働日数	品 目	反 当 生産費	反 当 働日数
米(自作)	239.87	21.0	胡 瓜	769.14	67.3
同(小作)	246.31	20.2	茄 子	641.21	62.5
大 麦	137.65	18.7	蕃 茄	1246.09	80.7
小 麦	146.08	17.5	日本梨	1301.61	87.2
大 豆	65.25	11.0	率 果	620.25	56.9
小 豆	77.13	13.2	葡 萄	879.32	44.4
甘 藷	308.61	25.9	大 麻	607.18	70.8
馬鈴薯	253.10	24.0	蘭 草	466.87	69.4

小泉所：日本農業の特質と質的作物、
蚕糸界報、No. 687.

ところで、このような経営部門を農業組織に組込む場合、当然考慮されなければならないことは、農業の営まれている立地条件と自己の有する生産条件である。

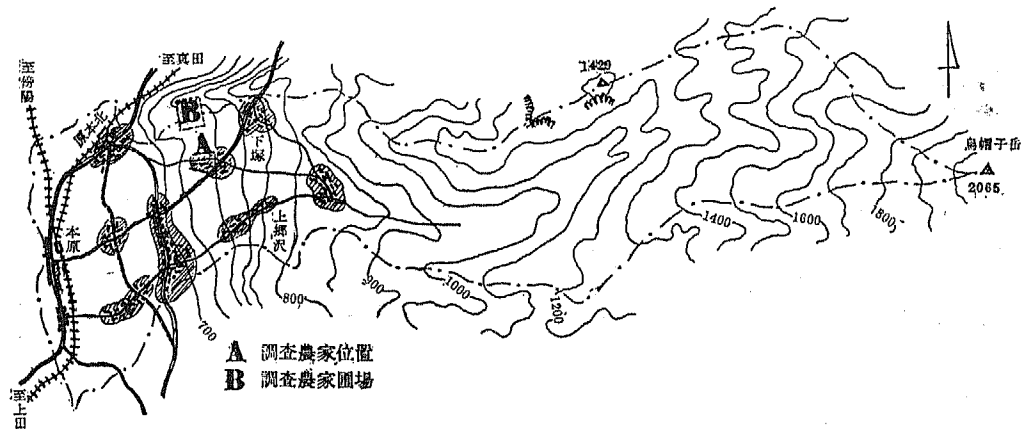
ここで問題としているのは傾斜地に立地する農家である。傾斜地は前述のように多くの点に於て不利な環境条件の下にあると云うが、深根性作物、薄荷、除虫菊又はヤハズ草、クローバー等の牧草は、土壤の浸蝕を防止し之を保護することによつて比較有利性をもつことが出来ること云われる。⁽¹⁾特にそこに於ける気候条件に好適な作物が若し見出せるならば、それ等の作物は平地に比し絶対有利性をも持つに至るかも知れないのである。

以下この農家が住する村の自然環境を概観し、彼は如何に計画的に環境に適合する作物を選択したか、そしてそのものは彼の経営に何をもたらしたかについて概説して見よう。

3. 自然環境

考察の対象とせる農家の存在する長野県小県郡本原村は、烏帽子火山群の一つである烏帽子岳（2065m）の西

麓に、その火山噴出物によつて形成された広大な傾斜地帯に位置する一村であつて、上田盆地の一部をなしている。（第1図参照）



第1図 本原村略図

先ずその気象条件を見るに、こゝは本県に於ても気温に恵まれ冷害の憂いの少い安定した地域である。即ち年平均気温 10°C 、1月及び8月の平均気温はそれぞれ -2°C 、 24°C である。又この村は全国的にも寡雨乾燥地帯として知られている上田盆地の一部に位置しているので、冬季は降水量少く乾燥し、梅雨期にも梅雨現象は余り顕著ではない。その年間の平均降水量は967mmで1000mmを割り、月別の極大は6・7月の125mm及び9月の150mmで、極小は1月の30mmである。⁽²⁾

海拔と土地利用の関係を見ると、600mから900mにかけて耕地が見られ、凡そ800m附近の下塚・上郷沢部落を境に、その下方に水田、その上方に畑地が多く見られる。

4. 経営の分析

経営部門の変遷過程を考察するにあつては、便宜上、太平洋戦争の終結せる昭和20年を境として前後二期に分つてすることにする。

(1) 養蚕部門の縮小に伴う果樹作経営への転換準備期

(昭和11~20年)

この期間は蚕種製造を中心とする経営から果樹作（苹果）経営への転換準備期であると言ふことが出来る。

当該期間に於ける経営内容の推移を見るため、この期間の初期と末期の作付面積及び投下労働力割合を比較して見るならば、第2表及び第4表の如くである。

これ等諸表から作付面積の変遷を見るに、反別の減少

せる主なるものは桑と花卉であつて、それぞれ6反、1反9畝の大巾な減少を示しているが、之に反し苹果は、桑園の減少面積に略々比激して5反7畝増加している。之に次いで畑麦、野菜である。

また労働力の増減は花卉を除く作付面積のそれとほぼ平行している。即ち年間の作業別所要労働割合を比較して見ると、減少の最も著しいものは蚕種製造を含む養蚕部門であつて、末期には初期の1/8に著減している。養蚕関係の縮小に反し増加せる主なるものは野菜と苹果である。

上述せるところから明らかなように、この期の初期の当経営は蚕種製造部門が中心をなしていた。それが僅々数年を出ずして縮小廃業するに至つた経緯は次の如くである。

蚕種製造業がこの経営に採り入れられたのは大正11年現経営主に依つてである。これが導入の契機は単に価格面に於ける有利性に基くものみならず、自然条件が亦、それに恰好のものだつたからである。即ち通気良好にして砂礫土の南面傾斜地は浅根性作物を植えるよりも、果樹、桑等の深根作物を作ることによつてより高度の能率を期待しうる。また種繭用の蚕兒飼育に當つては、蟹蝨害のない歩桑が要求されるのであるが、この傾斜地はかゝる目的のための歩桑桑園を設けるに好適の土地であつた。

然るに蚕種製造業は、一代交雑種並びに人工孵化法の普及等の技術の進歩、養蚕組合の発達による需要の大口

化、各種の検査取締の強化等々、社会的経済的諸事情の変化から漸次規模の拡大化を不可欠とされた。

かかる情勢下に於て、この経営主は早くも経営の転換を決意し、桑園に利用されていた傾斜地に苹果を導入することとしたのである。而して昭和20年を期して蚕種製造を廃業し苹果中心の経営に移るべく、13年から桑の抜根と苹果の新植に着手し、20年には完全に転換を終了する予定を樹てたのであった。

然るにこの間、戦争の進展による生糸の輸出絶絶はわが国蚕糸業の再編成を余儀なくし、16年に於ける蚕糸業統制法の施行によつて当然経営の転換をせざるを得なくされた。この事は当初の計画に若干の齟齬を来たし、ここに此のギャップを何によつて埋めるかと云う経営組織改編の問題が登場して来たのである。

かくして花卉がこの空隙を埋めるものとして導入された。幸い宅地裏の比較的平坦な畑地2反余に花卉を栽培していた経営主は、茲に経営の重点を置き換えた。このことは別表、作業別労働割合並びに年間収入割合を見れば容易に首肯しえよう。(第4・5表)即ち花卉労働は全所要労働の3割乃至3割5分に達し、その収入は既に全農家収入の7割にも達した。これはこの経営を取り巻く自然環境が海拔高く従つて紫外線に富む結果、極めて花色の鮮明度の高い商品が得られたことと、又花卉は質的集約作物として良質の労働を多量に受入れた時商品価値の高いものとなることと云う事情から、養蚕から解放された労働がこの部門に集中されたことによると思われる。

然るに社会的環境は更に変換して、花卉は18年8月の「第2次食糧増産対策要綱」によつて不急作物としてその栽培が禁止され、食糧増産への転換を余儀なくされた。かくして花卉は19年に至つては僅かに2畝に急減したのである。

然らば収入の7割余を支えていた花卉類の縮減によつてこれに投下されていた労働資本はどの面に転換吸収され、また何が之に代る収入源となつたのであろうか。

これは別掲の第2・4・5の諸表によつて明らかな如く、野菜がその機能を果たしたのである。表示された数字によれば19・20両年は、野菜に最も多くの労働力が投下され、作付面積も前年の約2倍弱に増反され、更に収入の面に於ても20年には総収入の36.4%を占めるに至り、収入順位の第一に位するに至つていたのである。

野菜の主なものは結球白菜であつたが、此の白菜が又反当労働を多く要求する作物であり、気候的には日中高温にして夜間冷凍となる内陸性気候の土地を適當とする

が、こゝはその条件を満たす恰好のところであつたのである。而も白菜は戦時下乏しくなつた国民菜蔬の補給源として重視され、その生産には各種の助成政策がとられ増産に拍車をかけられた。にも拘らず戦争による生産諸条件悪化のため供給も次第に不足勝ちとなり、従つて価格も亦高騰を示したのであつた。

以上に互つて、この農家はこの期の初めには蚕種製造部門に重点を置いていたが、社会環境の変化は20年を期して苹果栽培中心の経営へ転換することを決意せしめるに至つた事情と、予期せざる戦争の勃発が斯業の痛止を更に早からしめ、ために此の空白期間は花卉と野菜によつて埋められることとなつた事情を述べた。

こゝで特に吾々の注意したいことは、この経営が果樹に経営の転換を行つていくことである。経営重点の変化は極めて明白であり、之に伴う労働資本の導入もまことに意欲的に行われている。而も採り入れられた作物は自然並びに社会環境の変化によく合致し、従つてより多くの収入を挙げると共に自家の労力資材をも亦、余すところなく吸収していると云う点である。

(2) 果樹作(苹果)経営中心の時期(昭和20~29年)

前期に於ては、その初期と末期とでは経営内容が著しく変化していたが、この期間には余り顕著な変動も見られず、当初の計画に随つて苹果栽培中心の経営が行われている。

第2・4表から窺えるように此の期に於ては前期のように甚だしい作付面積の変動は見られない。とは云え穀作物は作付反別、労働割合に於て共に減少し、代つて果樹と花卉が増加している。

既に述べたところから明らかなように穀作物は労働資本の比較的少く済む云々質的には粗放的作物であり、従つて有利性と云う点からは花卉、園芸、蔬菜等と比較にならない。このために24年莖類の統制が徹底されるや、この農家はいち早く花卉を探り上げ、爾來経営の中心を花卉と苹果に置いている。このことは第4・5表の労働力及び収入割合を見れば明瞭である。

こゝで吾々が特に注意しなければならないことは、この経営に於て24年頃より農業従事者数が激減したことである。即ちこれまで有力な労働源であつた経営主と女子2人が農業従事者として期待しえなくなつた為、家族の従事者は祖父、主婦の2人のみとなつた。

由来、質的集約作物はその作業の主要部分が家族労働によつてなされることが望ましいと云われる。換言すれば家族労働は細心の注意、勤勉、技術等の能力を多く要

求する農業部門に於て最も能率を高めうるのである。然るにこの経営に於ては家族労働の減少にも拘らず何故依然として質的集約作物に中心を置いていたのであろうか。これは立地が柳で苹果栽培に適していたことと、家族労働を補い得るような技術労働者を雇用し得る道が拓けて来たことによるのであろう。

先ず苹果の立地条件について見よう。苹果の栽培には気温6・7・8月の候、平均26°C内外、冬季12・1・2月には-10.5°C以上で且つ乾燥する土地がよいとされているが、当村は冒頭自然環境の項で述べた如く之らの必要条件を十分充たしうる地域である。このような気象条件即ち夏期の乾燥と仲夏以後の温度の減退は、苹果の生長力を抑制して養分の保留を増し、腋芽の膨大を促して花芽の着生を良好にし、結実を良好ならしむると云う効果を持つとされている。更にこの季節的な寒冷と乾燥、一日のうちの寒暑の差も果実の色沢、香味を上進するものと云われる。内陸性気候をもつ上田盆地はこの事からも正に絶好の条件を持つものである。地勢と土質の点から見ると、この農家の耕地は南面の傾斜地であり、且つ土質は礫質壤土であることが苹果の栽培には好適のものであつたのである。⁽⁴⁾

このように苹果への転換は自然環境の面で極めて有利であつた。

次に家族労働の不足を補うための雇用労働は、この年頃から可なり高度の技術をもつた者を雇用する道が開けて来たのである。苹果に於ては摘果とならんで最も多くの労働が要求されると云われる袋掛のために、特に青森地方から季節労働者を雇入れる道が拓け、花卉栽培の主体をなす洋菊に於ても、6・8月の芽掻きの際に熟練労働者を雇用しうようになつたのである。

このような事情が家族労働が激減したにも拘らず、質的集約物中心の経営を依然として継続せしめた大きな理由であらう。

5. 結 語

以上、傾斜地農業の一典型を示すと思われる農業経営について、それがいかに自然的社会的環境と自からの持つ生産条件とに適合せる作物を、一貫せる計画性をもつて採用したかについて具体的に紹介した。

このような選択行動の結果、彼の経営は平地に劣らない程の収入をあげているのであつて、試みに彼の経営している平地と傾斜地との作付割合と作物別収入割合とを見ると第3表及び第5表の如くである。之らによれば前期・後期を通じて傾斜地の平均作付割合87.5%（前期は桑、後期は苹果）から平均収入45.7%を挙げているのである。不幸にしてこの農家に於ては農業支出がこゝに利用しうようにならなされておられないので、傾斜地、平地地別所得については之を知り得ないのであるが、恐らくは第5表の数字と大きな開きは示さないだろうと思われ。これによつて観れば傾斜地としてその立地の環境を見極め、之に適する作物を選択するならば平地に劣らない程の収入又は所得を期待しうるのであつて、この農家の如きは傾斜地に於て絶對的有利性を克ち得ているのである。

終りに花卉について一言すれば、花卉は全期を通じて7.6%と云う僅かな作付割合であるにも拘らず、総収入の25.4%をあげているのであつて、この点についても環境並びに生産条件と作物選択の適合の重要性について教示するものがあると思われる。

(1955.11.30)

参 考 文 献

- 1) 沢村・森編：あたらしい農業経営，205-206.
- 2) 長野県地図研究所：長野県地図大系（昭和29年）.
- 3) 富樫常治：実験果樹栽培講義，236-239.

附 表

第2表 作付反別表

(單位畝)

年度	地 形 作物	傾 斜 地			平 坦 地						
		桑	苹 果	花 卉	野 菜	水 稻	田 麦	畑 麦	雜 穀	馬 鈴 薯	桑 苗
昭 和	11 年	69	—	21	2	36	11	6	4	6	2
"	12 年	69	—	23	8	36	11	6	4	6	—
"	13 年	60	10	20	8	34	11	8	4	6	2
"	14 年	60	10	20	10	34	11	8	4	6	2
"	15 年	36	30	22	10	34	11	8	5	7	2
"	16 年	21	45	20	10	34	11	11	8	7	2
"	17 年	12	54	20	12	34	17	19	14	7	2
"	18 年	12	54	10	10	36	17	19	15	6	—
"	19 年	9	57	2	20	36	18	25	13	8	—
"	20 年	9	57	2	12	36	20	26	21	7	—
"	21 年	9	57	3	10	36	20	25	22	7	—
"	22 年	9	57	4	6	36	20	25	25	6	—
"	23 年	9	57	7	6	36	17	23	22	5	—
"	24 年	9	57	12	5	33	17	21	21	5	—
"	25 年	9	57	12	6	33	17	22	18	4	—
"	26 年	9	57	13	6	32	17	22	20	4	—
"	27 年	9	57	12	5	33	14	21	21	5	—
"	28 年	9	57	12	6	33	14	22	20	4	—
"	29 年	9	57	13	6	32	14	22	20	4	—

(備考) 田麦・雜穀・野菜は裏作。

第3表 作付割合表

(%)

年度	地 形 作物	傾 斜 地			平 坦 地								小 計
		桑	苹 果	小 計	花 卉	野 菜	水 稻	田 麦	畑 麦	雜 穀	馬 鈴 薯	桑 苗	
昭 和	11 年	44	—	44	13	1	23	7	4	3	4	1	56
"	12 年	42	—	42	14	5	22	7	4	2	4	—	58
"	13 年	37	6	43	12	5	21	7	5	2	4	1	57
"	14 年	36	6	42	12	6	21	7	5	2	4	1	58
"	15 年	22	18	40	13	6	21	7	5	3	4	1	60
"	16 年	12	27	39	12	6	20	6.5	6.5	5	4	1	61
"	17 年	6	28	34	11	6	18	9	10	7	4	1	66
"	18 年	7	30	37	6	6	20	9	11	8	3	—	63
"	19 年	5	30	35	1	11	19	10	13	7	4	—	65
"	20 年	5	30	35	1	6	19	10	14	11	4	—	65
"	21 年	5	30	35	1.5	5	19	10.5	13	12	4	—	65
"	22 年	5	30	35	2	3	19	11	13.5	13.5	3	—	65
"	23 年	5	31	36	4	3	20	9	13	12	3	—	64
"	24 年	5	32	37	7	2.5	18	9	12	12	2.5	—	63
"	25 年	5	32	37	7	3	19	10	12	10	2	—	63
"	26 年	5	32	37	7	3	18	10	12	11	2	—	63
"	27 年	5	32	37	7	3	18	8	12	12	3	—	63
"	28 年	5	32	37	7	3	19	8	13	11	2	—	63
"	29 年	5	32	37	7.5	3.5	18	8	13	11	2	—	63

第4表 年間作業別労働割合表

(その1) (%)

年度	地形 作物	傾斜地				平垣						
		桑園	養蚕	蚕種	苹果	小計	花卉	野菜	稲作	麦作	雑穀作	薯作
昭和11年		12.9	35.7	22.0	—	70.6	4.3	1.9	6.5	—	—	—
" 13年		12.6	30.2	15.7	1.0	59.5	20.4	1.9	6.9	—	0.1	—
" 14年		10.9	28.1	12.1	1.3	52.4	26.0	1.3	6.9	—	—	—
" 15年		8.2	33.0	10.8	1.5	53.5	29.1	1.8	6.9	0.2	—	—
" 16年		9.8	33.7	2.6	2.0	48.1	25.4	5.0	8.8	1.9	—	—
" 17年		9.0	21.1	—	4.7	34.8	30.6	6.2	8.6	3.3	0.5	—
" 18年		5.8	11.5	—	10.3	27.6	35.7	7.2	9.9	3.9	2.0	—
" 19年		2.1	6.4	—	15.1	23.6	5.7	22.7	13.0	8.3	7.4	1.2
" 20年		2.8	5.4	—	13.2	21.4	1.4	19.1	14.3	9.4	7.3	3.7
" 21年		1.5	4.3	—	17.9	23.7	0.8	13.6	16.8	13.5	7.5	4.0
" 22年		1.0	4.6	—	19.4	25.0	2.7	10.7	15.2	15.6	5.5	4.5
" 23年		1.4	4.2	—	27.6	33.2	9.5	6.8	15.5	10.5	6.7	3.8
" 24年		1.0	2.8	—	28.2	32.0	15.0	5.9	13.0	11.1	5.4	3.0
" 25年		1.2	—	—	31.5	32.7	14.4	7.5	15.2	10.4	4.9	2.0
" 26年		1.2	1.7	—	30.2	33.1	22.6	5.7	13.1	10.0	2.8	2.0
" 27年		0.8	0.7	—	39.9	41.4	20.8	4.2	12.8	7.9	2.3	1.6
" 28年		1.0	—	—	34.8	35.8	24.5	4.3	10.0	8.3	2.3	1.5
" 29年		1.1	—	—	31.5	32.6	32.9	4.3	10.6	8.3	1.7	1.3

(備考) 昭和12年度欠。

第4表 年間作業別労働割合表

(その2) (%)

年度	地形 作物	地		其の他							計	
		桑苗	小計	畜産	椎茸	薬加工	自給肥	山仕事	家事	雑事		小計
昭和11年		2.0	14.7	—	—	4.8	—	1.5	1.6	6.7	14.6	100
" 13年		1.2	30.5	0.1	—	2.1	0.8	0.2	1.7	4.9	9.8	100
" 14年		1.4	35.6	—	—	3.6	0.8	1.1	1.2	5.2	11.9	100
" 15年		1.4	39.4	0.2	—	0.6	1.0	—	1.3	4.0	7.1	100
" 16年		0.9	42.0	—	—	1.2	—	0.9	3.0	4.9	10.0	100
" 17年		0.2	49.4	0.2	—	2.1	0.9	0.8	4.1	7.6	15.7	100
" 18年		—	58.7	0.2	—	1.9	0.5	0.7	3.3	7.0	13.6	100
" 19年		—	58.3	0.3	—	1.8	0.4	0.3	7.9	7.5	18.2	100
" 20年		—	55.2	3.0	—	0.8	0.6	2.8	5.6	10.7	23.5	100
" 21年		—	56.2	0.2	—	1.3	1.1	1.6	8.4	7.4	20.0	100
" 22年		—	54.2	0.6	—	2.2	1.2	2.7	6.3	7.9	20.9	100
" 23年		—	52.8	1.4	—	1.9	0.7	1.3	4.2	4.5	14.0	100
" 24年		—	53.4	1.0	—	1.1	1.0	2.7	4.1	4.8	14.7	100
" 25年		—	54.1	1.7	—	0.2	1.6	1.6	3.6	4.1	12.8	100
" 26年		—	56.2	2.0	—	0.7	1.4	1.3	3.0	2.3	10.7	100
" 27年		—	49.6	1.9	—	—	0.7	0.3	1.4	4.5	8.8	100
" 28年		—	50.9	2.6	—	0.7	0.5	1.7	2.6	5.1	13.2	100
" 29年		—	59.1	3.0	0.4	—	—	1.6	1.2	2.2	8.4	100

第5表 年間収入割合表 (その1) (%)

年度	地形 作物	傾 斜 地				平 坦 地						
		蚕種	養蚕	桑園	苹果	小計	花卉	野菜	穀類	薯類	桑苗	小計
昭 11	年	64.0	6.2	—	—	70.2	23.2	—	—	—	1.4	24.6
" 12	年	60.5	5.1	—	—	65.6	27.0	—	—	—	1.2	28.2
" 13	年	61.3	3.2	—	—	64.5	26.1	—	—	—	2.6	28.7
" 14	年	59.5	3.8	—	—	63.3	25.4	—	—	—	1.5	26.9
" 15	年	50.2	17.3	—	—	67.5	23.5	0.4	*1.0	—	1.0	25.9
" 16	年	23.9	16.4	—	—	40.3	35.7	5.8	1.0	—	0.6	43.1
" 17	年	—	17.0	—	—	17.0	70.5	3.2	1.6	—	0.4	75.7
" 17	年	—	7.3	—	4.3	11.6	72.5	2.5	2.1	—	—	77.1
" 19	年	—	4.1	—	14.1	18.2	37.8	33.7	4.7	—	—	76.2
" 20	年	—	2.0	—	33.0	35.0	1.4	36.4	3.1	8.0	—	48.9
" 21	年	—	1.9	—	36.0	37.9	2.6	27.7	7.5	3.0	—	40.8
" 22	年	—	1.6	—	59.8	61.4	6.3	6.8	6.7	2.1	—	21.9
" 23	年	—	1.5	—	59.0	60.5	15.1	6.4	6.3	1.0	—	28.8
" 24	年	—	1.0	—	35.9	36.9	28.4	4.3	6.1	0.9	—	34.7
" 25	年	—	—	0.6	33.1	33.7	24.3	2.9	10.0	0.8	—	38.0
" 26	年	—	—	3.0	41.8	44.8	15.3	1.8	6.7	1.4	—	25.2
" 27	年	—	—	2.1	37.2	39.3	20.0	2.0	6.0	—	—	28.0
" 28	年	—	—	1.8	51.5	53.3	16.0	1.7	2.0	—	—	19.7
" 29	年	—	—	1.2	45.8	47.0	16.0	1.4	4.7	—	—	22.1

第5表 年間収入割合表 (その2) (%)

年度	地形 作物	其 の 他								計	
		畜産	山林	胡桃	農産種子	小作料	給料	雑収入	臨時		小計
昭 11	年	—	—	0.6	—	1.4	—	3.2	—	5.2	100
" 12	年	—	—	0.4	—	1.2	—	4.6	—	6.2	100
" 13	年	—	—	0.5	—	1.3	—	5.0	—	6.8	100
" 14	年	—	—	1.0	—	2.0	1.5	5.3	—	9.8	100
" 15	年	2.2	0.5	0.7	—	1.2	—	2.0	—	6.6	100
" 16	年	1.5	—	0.6	—	0.2	—	1.9	12.4	16.6	100
" 17	年	1.2	—	0.5	3.2	0.3	—	1.6	0.5	7.3	100
" 18	年	1.0	—	—	3.0	0.2	—	2.2	4.9	11.3	100
" 19	年	—	—	—	—	0.3	3.6	1.7	—	5.6	100
" 20	年	2.8	0.3	—	—	0.4	2.1	3.4	7.1	16.1	100
" 21	年	10.1	—	—	—	0.5	6.9	3.8	—	21.3	100
" 22	年	0.3	—	—	—	0.2	10.0	0.1	6.1	16.7	100
" 23	年	3.6	—	—	—	0.3	5.5	1.3	—	10.7	100
" 24	年	5.1	—	—	—	0.3	15.5	1.5	6.0	28.4	100
" 25	年	3.2	—	—	—	0.4	23.1	1.6	—	28.3	100
" 26	年	4.8	—	—	—	0.3	21.4	3.5	—	30.0	100
" 27	年	6.9	—	—	—	0.3	21.2	4.3	—	32.7	100
" 28	年	4.0	—	—	—	0.2	19.4	3.4	—	27.0	100
" 29	年	5.0	—	—	—	0.2	21.0	4.7	—	30.9	100